

Mail

～旅する建材が育てる「函館スタディベース」～



1. 設計趣旨 ～参加成長型建築～

函館には歴史があります。その多くは、来訪者によってもたらされました。和人の進出から始まり、松前藩、屯田兵、ロシアなどが代表的なものでしょう。逆に、「あるもの」として自然の恵み、気候に対峙する営みや食文化などが挙げられます。「あるもの」と「くるもの」、その出会いが、函館の歴史と文化をはぐくんできたのではないのでしょうか？

旅行者が地域の人と学びながら巡るスタディツアーは、両者の接点として有効です。歴史ある建物の中で函館の歴史や食文化を学ぶことができ、また、ボランティアガイド等の拠点になる施設（スタディベース）を提案します。さらに、ツアー参加者が函館の「体験」を、言葉に残し、自宅から投函することで、それが、「建材」として、参加者の手によって建物の一部になる。そんな参加成長型建築でもあります。

2. 旅する建材 ～はがき型回遊建材～



はがきサイズにカットされた木製の板を用意します。切手を貼って郵送できるこの板が、世界を旅したのち、函館に帰ってきます。

case 1



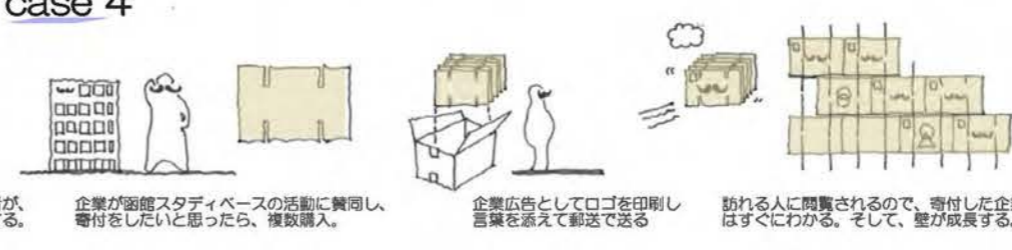
case 2



case 3



case 4



一つひとつの「はがき」は小さいので、小さな子供でも積み上げることが可能です。世界中から参加者でき、小さな気持ちの集積が、大きな壁となり、空間になります。

3.地域住民の参加/旅行者の参加

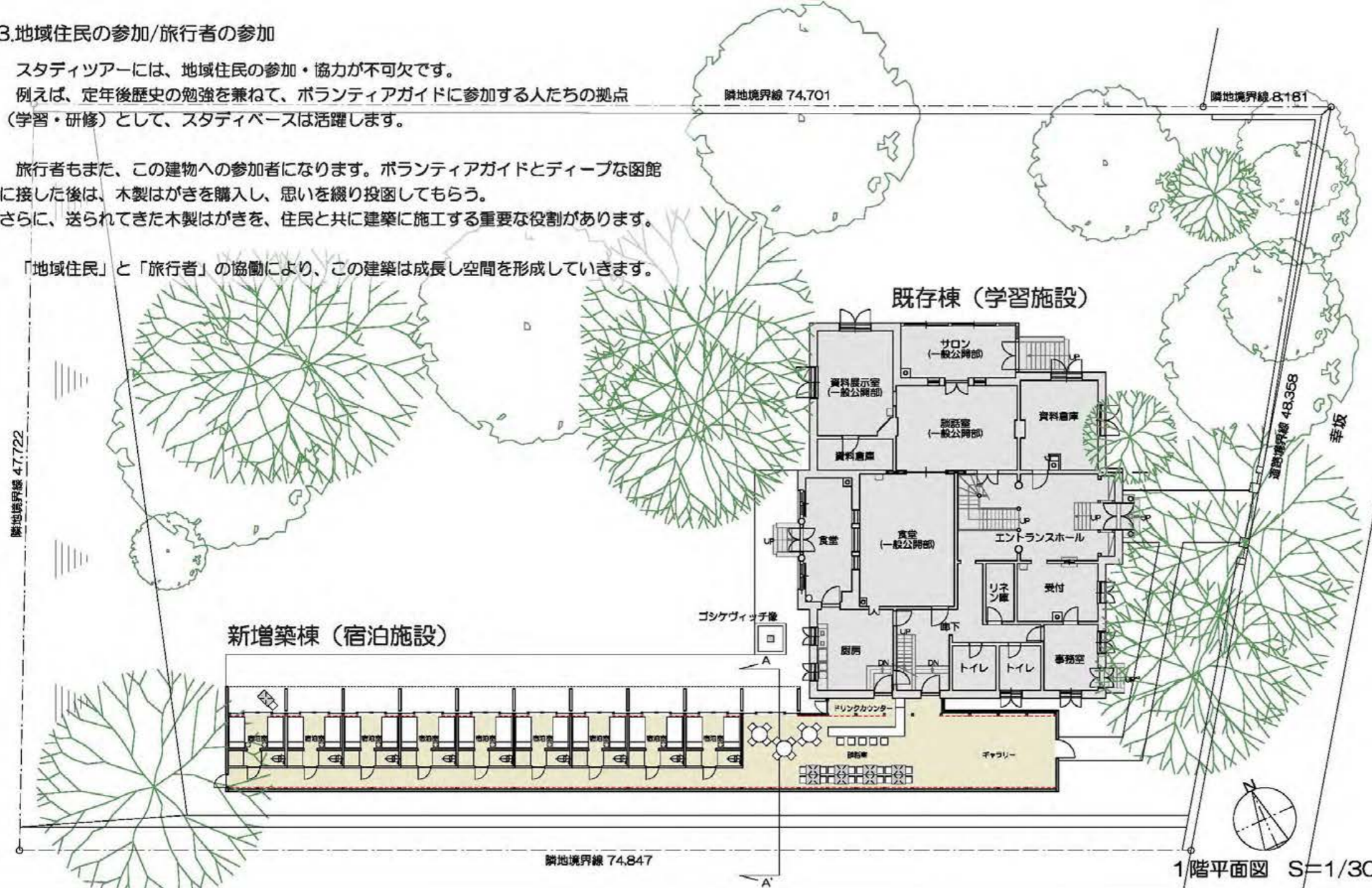
スタディツアーには、地域住民の参加・協力が不可欠です。

例えば、定年後歴史の勉強を兼ねて、ボランティアガイドに参加する人たちの拠点（学習・研修）として、スタディベースは活躍します。

旅行者もまた、この建物への参加者になります。ボランティアガイドとディープな図書館に接した後は、木製はがきを購入し、思いを綴り投函してもらう。

さらに、送られてきた木製はがきを、住民と共に建築に施工する重要な役割があります。

「地域住民」と「旅行者」の協働により、この建築は成長し空間を形成していきます。

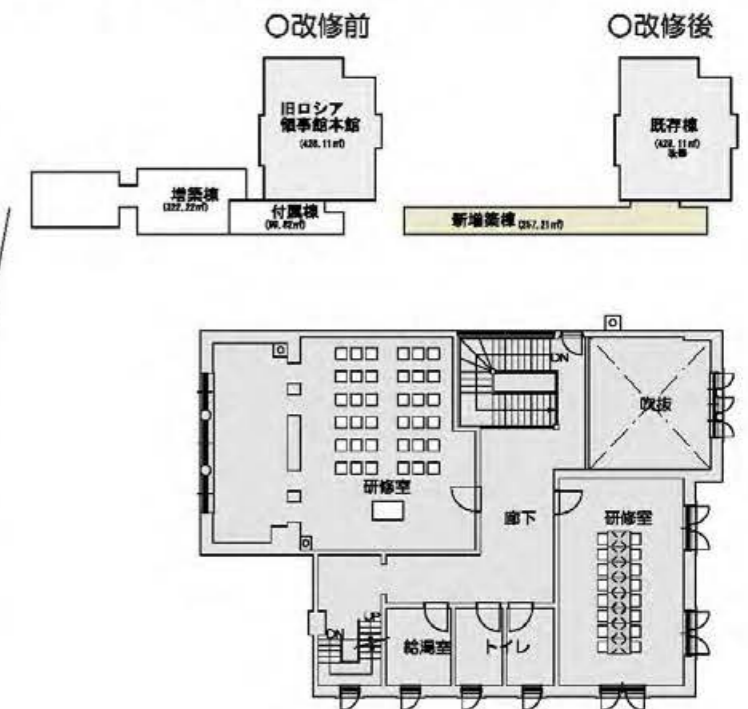


4.全体計画

旧ロシア領事館本館は、内外ともに設計当時の雰囲気を出す保存・修復を行います。

本館東側に位置する付属棟、増築棟は解体し、その範囲内のみで新增築棟として計画します。（伐採しない）

建物は平屋とし、旧ロシア領事館の外観を尊重し、目立たない背景となる建築を目指します。



5.新增築棟平面計画

新增築棟の用途は主に、宿泊施設となり、9室の宿泊室と飲食が可能な談話室から構成されます。（最大宿泊者18名）

談話室は、ギャラリーとしても日中公開され、この部分や、宿泊室の内部の建材として「木製はがき」を用います。

当初は何もない内装ですが、時間と共に参加者の手によって育っていく空間です。

6.既存棟平面計画

1階は用途変更をせず、文献を元に極力創建当時の再現をします。

スタディツアー宿泊者の朝食や夕食は1階の部分を利用する他、日中は有料（低額）で一般公開し、日々の歴史を紹介する場所とします。

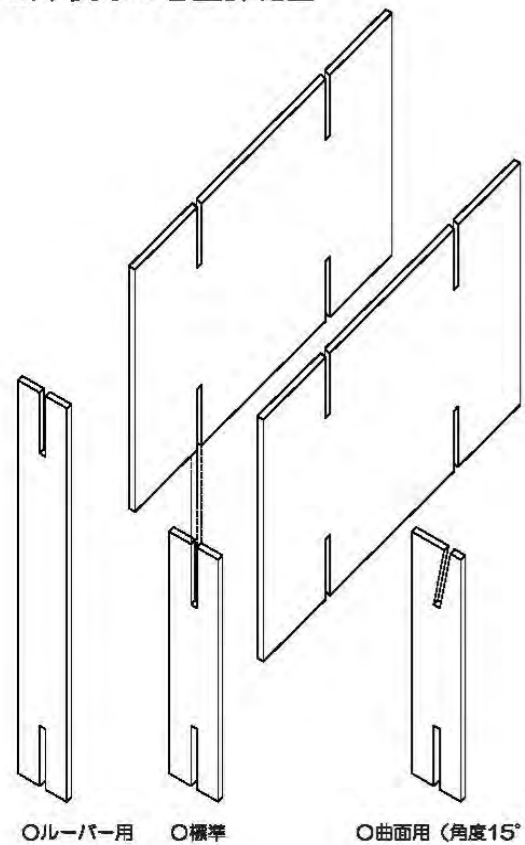
2階も部屋の大きさは変えず、大会議室、研修室として整備する他、玄関上部の部屋を無くし、開放的な吹抜としました。（消失前の階段部分を吹抜けとする）

7.予算計画

■概要	
新築面積：	257.00m ² （約76坪）
構造：	木造在来工法 平屋
■建設コスト	
本体費用：	78坪×90万＝6300万（木製はがきを含む）
修復費用：	2000万
外構費用：	500万
合計：	8800万+家具備品類
■収支計算（収入）	
宿泊費：	5000円/人×18（最大）×0.4（稼働率）×365＝13,140,000
入場料：	200円×30人（日平均）×365＝2,190,000
はがき代：	2000枚/年×1000円＝2,000,000
合計：	17,330,000円
■収支計算（支出）	
宿泊経費：	2000円/人×18（最大）×0.4（稼働率）×365＝5,256,000
はがき代：	2000枚/年×300円＝600,000
経費：	1,500,000（設備維持費）×3,000,000（その他経費）
合計：	10,356,000

各室には木製はがきのルーバーが窓際に設置され、庭と緩やかにつながっている

8.木製はがき壁詳細図



○ルーバー用 ○標準 ○曲面用(角度15°)

●ジョイント部材
ジョイントも同材とし、切れ込みの角度を変えることで、アーチやポールドになり、長さを変えるとルーバーになる。また、筋交いの代わりに耐力壁になる可能性も持っている。



煉瓦も一つひとつは小さく、表情も異なる。しかし、集まった時には、全体としての表情を作り出す。



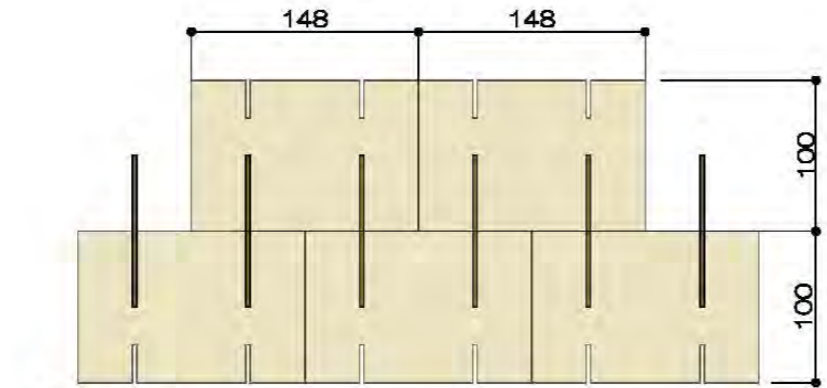
湯島天神の絵馬。個々の思いを残すことが、風景になっている。前の人の言葉を読むのも面白い。



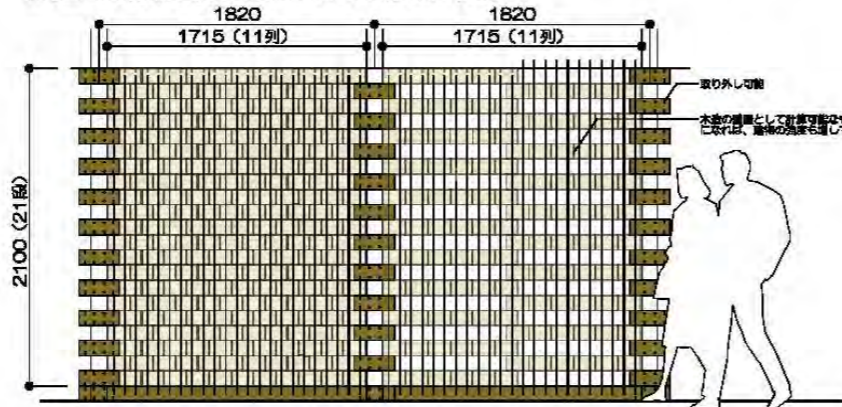
伏見稻荷の連続する独特な空間も寄付によって成り立っている、参加型建築と言える。



解体時に廃材として出る煉瓦。砕いて底にまくことで、底の色彩が、既存の建物と調和する。

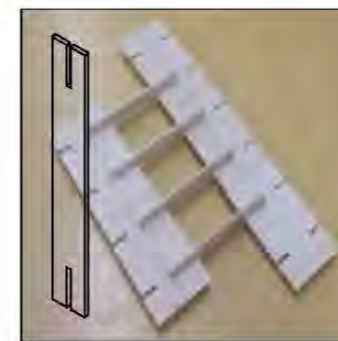


●木製はがきサイズ
1つの「木製はがき」の寸法は148×100 ちょうど宮製はがきのサイズ。厚みは3mm。北海道産の間伐材を利用した無垢もしくは集成材とする。

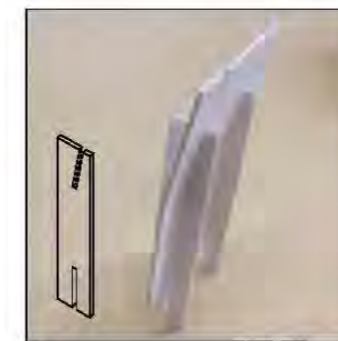


●一般部
モジュール1820間の高さ2200の壁に、231枚の木製はがきで構成される。(木造 壁倍率2.0倍を目指す)

●ルーバー部
スキマを空けてくみ上げると、風が通り、126枚の木製はがきで構成される。(木造 壁倍率1.0倍を目指す)



ジョイント材を変えることで、様々な表情を作り出すことができる。例えばルーバー状にすると、風が抜ける。



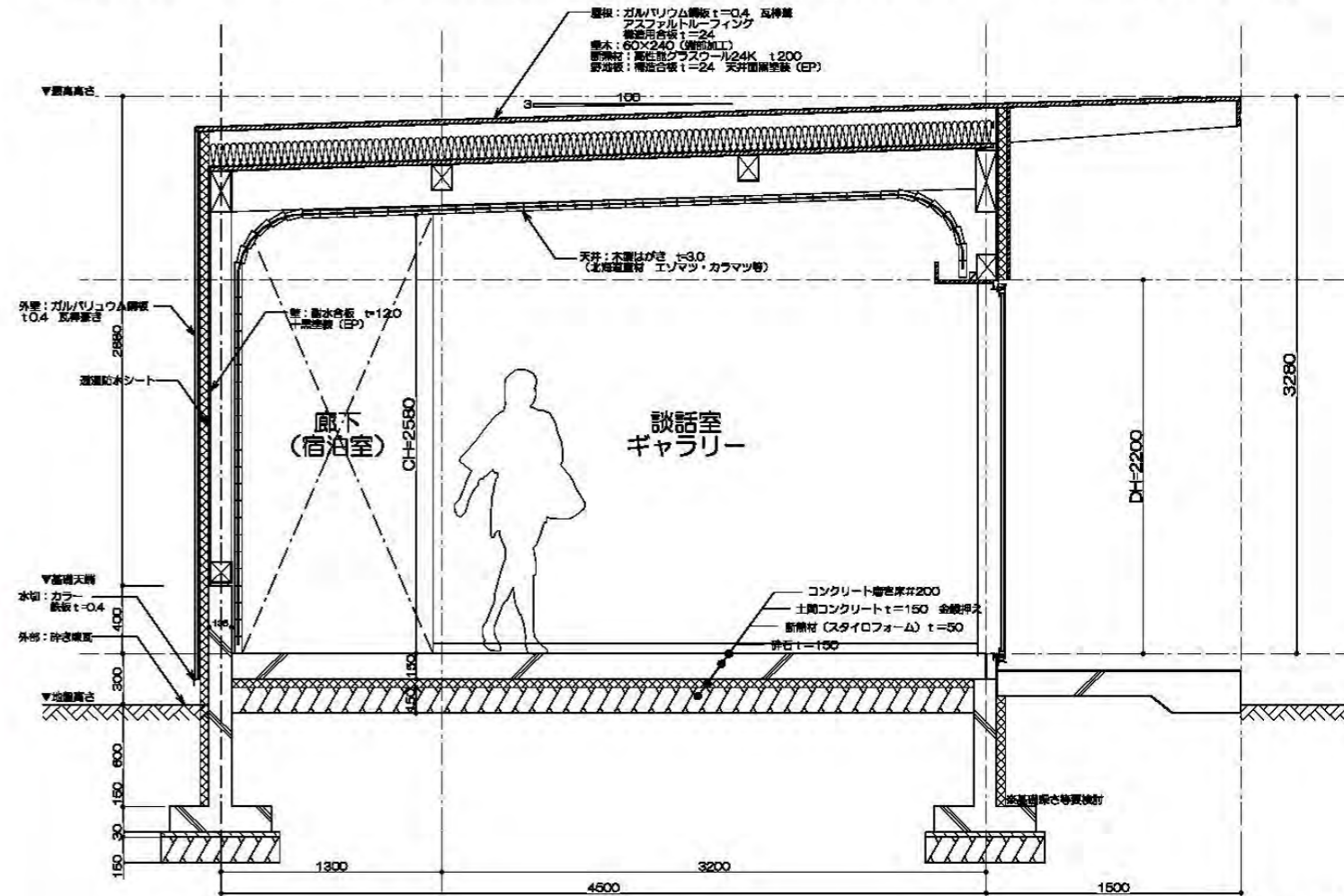
ジョイントや作り方を工夫すれば、家具も製作可能。室内にある家具は、はがきから作り出すのも面白い。



幼稚園から高校生まで、地域のワークショップを通じて歴史を学ぶ機会を創出すると同時に壁を積み上げる。



木製はがきを使ったキャンドルスタンドや照明の傘などを製作し、お土産物としての商品開発やデザインもする。



A-A断面図 S=1/40

9.立面計画

新增築棟は、既存棟(旧ロシア領事館)のファサードを尊重し、極力背景になる建築物を目指します。具体的には、建物の高さを4m以下に抑え、周囲の木々の枝の下に建物が入る計画とします。

庭に面するサッシュは、高断熱サッシュを採用し、縦方向を強調し、周囲の木々の垂直ラインと重なるようなデザインとします。

色彩計画は、既存棟の赤い煉瓦の色に近い、ガルバリウム屋根、壁材を選び、サッシュはシルバー色とし既存建物との調和を図ります。



10.断面計画

新增築棟の断面は、単純な断面の連続の構成とし、はがき(148mm)のモジュールに合うように@1820を採用します。

柱寸法は105×105を基本とし、(道産材を使用)土台は120×120を使用します。

窓の高さは、木々の足元がに意識が向くように高さを押さえて2200mmとし、壁から天井までは、はがきの内装が空間全体を包むように配置しました。

